

2025年7月

課題本 『パンに書かれた言葉』

朽木 祥/作

小学館

2022年

◆◆◆7月の読書会から

先月の振り返りから始まりました。記者の熱意には頭が下がるという意見、ひっそりと死んでいったその人の想いを大切にしてほしいという意見が出ました。「この世に無縁ということはない」という吉川先生の言葉も印象に残りました。

今月の課題本は『パンに書かれた言葉』、作者は広島出身の朽木祥です。これまでの読書会で課題本としてとりあげたこともある作家です。

(文責:森下)

2025 年7月竹原読書会『パンに書かれた言葉』

(朽木祥 小学館 2022)

吉川五百枝

80 年前の 8 月、世界で初めて 2 発の核爆弾が地上に落とされた。たった2発の原子爆弾で何がおきたか。ヒロシマで14万人、ナガサキで7万人の命が消えた。今も消息不明の人達があり、死者数は確定的ではない。植物も動物も巻き込んだ。

そして、80 年が経った。あれから、核爆弾を使われることはなかったが、各国が持つ核爆弾は、地球を何回も壊すことが出来るほどに増えているそうだ。今や、日本のヒロシマ・ナガサキだけの問題ではなくなった。国同士、民族同士の小競り合いにも、核爆弾の脅かしが登場する。しかも、その脅かしは現実味を帯びているのだ。

人間のなんと愚かしいことか。ヒロシマ・ナガサキから学べないのだろうか。広島に住む身として、いたたまれない。

今回の作者朽木 祥さんは、被爆二世だそうだ。切実に「反戦」の想いを持つだろう。そして、この問題の根を、アメリカと日本という2 国間の事件では無く、ヨーロッパを含めて、「戦争をする人間」の問題なのだと小説にした。

数字だけで表されがちな戦争の被災を、個人にスポットライトを当てれば、強さも弱さも支えられている勇気も混在する姿がよく見えてくる。小説なればこそ、歴史的時間や地理的距離感を同じ紙面に並べ、何を指すのかを語る事が出来る。

書かれているのは、地理的に言えば、「私」の住む鎌倉と父の祖父母が居る広島、そして「私」の母の故郷イタリアのステラマリス村である。その背後に、ドイツ、フランス、イギリス、ポーランドなどのヨーロッパ各地とアメリカがある。

時間的には、1933 年から、2022 年まで約 90 年間を念頭に置かなければならない。

その間、1人1人に、歴史や言い分があろうけれど、その期間を大きく言葉にすれば、ヨーロッパで戦いの火蓋を切り、1945 年まで戦い続けたことは、間違いだったと言う他はない。その間違いが、この作品で、ヒロシマ・ナガサキの原爆投下で起きた事や、ドイツナチ党とイタリ

ア国家ファシスト党の狂乱として描がかれている。さらにそれは混沌とした世情として今にひきつがれているのだ。

戦争は、戦う両者が「正義」を振りかざす。第2次世界大戦に参戦した国々は、それぞれが「正義」となる理由を掲げた。どんな理由を掲げようと、武器を持って相手を殺し合って正義を主張する事の正当性を認めることが出来ようか。戦争は、人々が考えることを停止させる。自分とは違う「正義」を求める立場もあると考えることを消してしまうのだ。戦争が終わるということは、人々が、考えるということを取り戻すことだ。そして、なぜこのようなことが起きたのか考え始めるということだ。

そのために、人間のした事を辿っていく今回のような作品が必要となる。98年間を描いても、描き尽くせるものではない。だから、考えることを止めてはいけない。

きっと作者は、ヒロシマだけではなく、ヨーロッパにも舞台を広げて戦争がどういうものかを伝えておきたかったのだろう。

あれだけ大変な目に遭ったのに、また、自国防衛という名の下に戦争の準備が盛んになってきた。前の戦争から「戦争は間違いだ」と学んでいないのだろうか。

人間は、忘れる。「喉元過ぎれば熱さを忘れる。」多くの人が納得するのだから、諺として残って居る。戦争準備品は、もう、喉元に暑さの記憶を置いてきてしまったようだ。逆に、「羹に懲りて膾を吹く」ともいう。熱い吸い物に口をつけた痛さが忘れられなくて、冷たい酢の物も吹いて冷まそうとする。戦争で肉親を殺された記憶から、他の国が侵攻してくると想定して軍事力を高め、抑止力と称する。

どちらも、人口に膾炙している諺なのに、共に諸諺の中にある人智を無視している。それが人間の持って生まれた性質なら、何度も痛さを繰り返さないために、少しでも間違いを避けようとするのが生活の智慧だ。その智慧の最たるものが、「伝える」という行為だろう。戦争が、痛くて熱くて苦しいものだ伝える小説は、読むに堪えないほどの具象を突きつけてくる。いくら読みたくなくても、事実は事実なのだ。日常で起きた実際の写真を見せ、どんな苦しみだったかを語り、どこから生じたかということをしらせ、どのように避けるか時間をかけて次世代へ言い継ごうとする。

この作品の中では、ヒロシマ・ナガサキはもちろん、イタリアでも、ドイツでも、フランスでも、自分と家族の体験を周りに伝えようとしている。

「私」は13才の少女。父は日本人。母の故郷イタリアのフリウリの村は、今、澄んだ青緑の川が流れ、なだらかな青々とした土地が続く美しい村として描写される。その美しさを強調しておいて、対照的な戦争中の体験が語られる。1943年、祖母と同級生だったユダヤ人の友は詩集を残して強制収容所に連行された。かくまった人は処刑された。「私」の大叔父パオロは、抵抗運動の活動者として処刑されたが、差し入れのパンに〈希望〉と書いて残した。「私」の祖父は、1945年8月6日、日本の広島で原爆を体験し、原爆によって焼かれた妹の日記の話をした。

それら「私」に直接繋がる人達が主人公のように書かれている。日本やヨーロッパで起きた事実と、それによって起きる人間の苦を「伝える」というテーマにして具体的に表現した。

さらに、共感共苦が最も難しいと想える「許し合う」というテーマを盛り込んでいる。戦争を起こしてしまった人間にとって、どうすれば過ちを許し合えるのか。作品上で作者が示してい

るのは、〈ぼく、顔を思い出したら銃なんか絶対向けられない〉とアメリカからの留学生は言う。〈見知らぬどこかの国ではなく、友だちの国だ。〉個人の友愛から、全体への友愛が広まることを願わずには居られない。しかし、ロシアに住む親戚や友人と戦っているウクライナの人の声も度々聞こえる。「許し合うこと」が出来れば、そもそも戦争など起きないはずだ。「共にこれ凡夫」なのだ。

もう一つのテーマは、「私」の名前にある「S」でもあり、処刑の日、パオロが差し入れのパンに書いて残した言葉でもある「スペンランツァ〈希望〉」だ。パルチザンの活動家が言う。〈何に抵抗しているのか解らなくなっていく〉という重い変化を見る。〈希望〉を目指して戦ったはずだ。何を〈希望〉と言ったのか。そしてそれほどの戦いをして得た〈希望〉を、今、私たちはどのように扱っているのか。エーリヒ・フロムの『自由からの逃走』に述べられる人間の振るまいが思われる。

戦争後、自由を得た人々は、孤独、無力、恐怖を味わい、自ら権威を求め、同調圧力を生み、ファシズムに身を委ねるようになっていくと述べている。〈希望〉と言う時、何を考えているだろう。それは、絶対的平和ではなかったか。

どんな理由があろうとも、「言葉(アート)の力」以外の兵戈を手にはならないのだ。共に凡夫である故に、兵戈無用なのだ。

『パンに書かれた言葉』を読んで

◆【 ZK 】

今回もナチスに関する本で読むのが辛くなり一度本を読むのを閉じてしまいました。イタリア人と日本人目線からみた戦争に関する児童書でした。原爆、ナチス、ムッソリーニ、三国同盟等が出てきて、歴史をあまり勉強していない私は調べ直す本を読んでいます。ユダヤ人を逃がしてあげる人と密告する人。その後かくまってあげた人は処刑されるのです。密告する人はわずかな食べ物と引き換えにしていたのです。アンネ・フランクもそうだったのです。

勢力に反対する人は紙に書いてビラをまいて言葉によって活動する人もいました。広島の前原爆の前に空から逃げろ！と書かれた紙を空からまかれていたのです。

言葉は人を元気づけたり、警告を与えるものとなっていたのです。殺された少年はパンに血で希望と書いていたのです。そしてそのパンは大切に保存していたのです。

最後まで希望を望んでいたのは神を信じていたからでしょうか？

言葉を詩のように書いて気持ちをスケッチするのは良いことだと書かれた文章が印象的でした。

◆【 JM 】

不勉強で、作者のことを全く知らなかった。たくさんの著書を出しておられるし、数々の受賞もされているようだが、作品に触れたことがなかった。

柔らかいクリーム色の地色にピンクのバラの花束、赤いスポーツカーを配した表紙・・・てっきり明るくロマンチックな小説と思って読み始めたが、私たちを取り巻く社会について考えさせられる小説だった。考えてみたら毎年 7 月は戦争を題材にした本なので当然そうであるはずなのに、可愛い表紙に不意をつかれた感じだった。

主人公のエリーは父親が広島出身、母親がイタリア北部の出身。そして物語は 2011 年 3 月 11 日の揺れから始まる。そう、東日本大震災の日である。エリーの住む鎌倉でも揺れ、東京で働く父親を心配する。それからのテレビの報道、原発事故、風評被害・・・エリーを心配した両親は母親の故郷へエリーを行かせる。

そこで見聞きしたものは、今までエリーが知らなかったことばかりだった。イタリア北部の街までナチスはユダヤ人狩りをしていて、ここから収容所に送られた人がいたこと、パルチザンの活動、弾圧・・・エリーにとっての大叔父はそれで亡くなっていた。そして、本書の題になっている「パン」は大叔父が残したものだ。「アンネの日記」の出来事は遠い国の話ではなく、自分に近い人たちにも起きていたのだ。

夏休みになり、広島の祖父宅に行ったエリーは原爆について見聞きする。そして、父親から受け取った手紙には「戦争も災害、人災」と書かれていた。

ナチスのユダヤ人狩りもパルチザンへの弾圧も福島の子力発電所の事故も、人災なのだ。自然災害は防ぎようがなく備えることが重要であるが、人災は防ぐことができる。

作者はあとがきで「本書が刊行されるこの夏には、どうかウクライナでの戦争が終結し、核の脅威が少しでも遠ざかっていますように」と述べている。残念ながら作者の願いからはほど遠く、ますます状況は悪化している。

「心にまとっている無関心というマントを破り捨てなさい」と作者は書く。名前しかない人などいない、数でしかない人などいない、みんなこの世に生きていたのだ。「忘れないで」

東日本大震災から数年後、福島を訪れた。避難地域内の、自動車の通行だけ許可になった道路を通った。つい昨日まで人々が住んでいたような家々が建ち並んでいる。大型家電店舗がある。しまむらのショーウィンドウには素敵な洋服を身にまとったマネキンが、ポーズを取って並んでいる。家々は窓ガラス 1 枚割れていない。しかし玄関前には立ち入り禁止テープが張られ、人影は皆無である。津波の被害を受けた地域の壊れた家々、瓦礫とは違う怖さを受けた。ゴースタウンだった。まさに「人災」だった。

人は学習し、予見できるはずである。「想定外の」と言うのは逃げである。地震多発の国に多くの原子力発電所を作り、現在 12 基が運転中、更に 3 基が計画中という。(資源エネルギー庁による)

「よくわからない」「自分が反対したところで」という「無関心のマント」をまとめて過ごしている間に危機的状況はひどくなっている。自分にできることを見つけるためにも、まず知ることから始めたい。

◆ 【 T 】

読書会で平和に関する本を取り上げみんなで読み合ったり、八月の記念式典が近づいて

きて、新聞やテレビで伝えられるニュースに触れたりした時に自分にできることは何だろうと考える。

することはたくさんあるが、まず大切なことは、正しく知ることだろう。その時何があったのか、そこにいた人々は何を考えていたのか。どのように行動したのか。

私自身は、広島県で生まれ育っているの、学習したり色々な情報に触れたりする機会は多く、また、当時広島で生活していた方や原爆投下後広島に入った方の話を聞くこともあり、ヒロシマについてはどのような状況であったか知ることができるが、第二次世界大戦中の北イタリアの様子については知らないことが多かった。

光は、祖母ノンナから当時の話を聞いた。戦争は間違っていると気づき、当時の権力に抵抗し反対運動をしていた人もいたが、相互監視や密告により反対運動をしていた人々が次々と捕まえられ処刑されていった。ドイツでの運動は白バラと言われているが、彼らのビラの中に、「心にまとっている無関心というマントを破り捨てなさい。」とあったそうだ。

無関心というマントは、日本にも当てはまるし、現代社会にもあてはまる。様々な問題に無関心で正しく認識しないままだと問題は解決しないし、同じ過ちを繰り返してしまう。

光のおじいちゃんは、今までは体験したことを話したがらなかったがフクシマの事故を見て、黙っていては同じことを繰り返すようになるかもしれないと考え、次の世代に原爆のことを語り継いでいく決心をした。話したくない、思い出したくないほどつらい記憶だったのだろう。

シンガーソングライターの吉川晃司さんが同じような事を言っていた。吉川さんのお父さんの実家の旅館は平和記念公園の側にあったそうだが、「親たちが力尽きそうになって初めて言い出すことがある。うちの父親もそうだけど。だから、あそこに実家があったのも知ったのは近年。話したがらなかったのにも、いろいろ理由があるのだろうけど……。俺たちがやれることはやっていかないとと思う。」と話していた。

これからも、本を読んだり話を聞いたりして、戦争について考えていきたい。

◆【 N2 】

東日本大震災のあった 2011 年 3 月、光・S・エレオノーラはママの故郷イタリア北部トリエステのフリウリ村に住むノンナ(祖母)の家で過ごすことになり、そのノンナの家の祭壇でサテンに包まれたパンを見つけました。そしてそのパンに文字が書かれていたところから物語が始まります。第二次大戦禍の人々の暮らし。自由を守るために戦った人たち、イタリアパルチザンのパウロ、ドイツミュンヘン大学のショル兄妹、そしてナチス占領下のフランスのレジスタンスはそれぞれ反戦のビラを作り、体制に対する抵抗運動を呼びかけました。体制と戦う人がいる一方、報酬のためにそれを密告する人もいて、人間を試されているようです。彼らは戦う手段の一つとして言葉の書かれたビラを用いましたが、言葉の大きな力を恐れたナチスは 1 億冊近い焚書を行いました。ヨーロッパはナチスによる迫害や被害が大きかったのですが、日本でも 8 月 6 日の原子爆弾によって広島市民の命や生活が一瞬で断ち切られました。「戦争で正しいものはない。警戒しなければいけない主義や思想があり、手遅れになったら、それに立ち向かうために自分も武器を取って戦う羽目になる。」とはノンナの弁です。

主人公の光は 13 才、サラも 13 才、真美子も 13 才、アンネ・フランクも 13 才。ゾフィー・ショールと彩香は 21 才、それぞれの国と時代が違っても日記やビラに残された彼らの言葉は、その思いを共感して自分の事として考える手助けになります。

パンに書かれた言葉「スペランツァ(希望)」、ビラに書かれた言葉「無関心というマントを破り捨てなさい」、エリュアールの詩「リベルテ(自由)」、真美子の日記、アンネの日記、ホロコースト博物館の写真集、これらは次の世代への遺言です。ひどいことが起きていても無関心ではなく自分のこととして考える手立てとなります。

災害の定義には人為的原因によるものも入っており、戦争も災害、人災だとしたら、それを防ぐ手立てとして言葉の力が大きいことがわかります。

令和 7 年 4 月 1 日現在の被爆体験伝承者は 239 人と家族伝承者 39 人の方が活動中だそうです。二度と同じ過ちを繰り返さないためにも、改めてこの方々の言葉を聞かせて頂きたいと思います。

◆【 KH 】

東日本大震災後の鎌倉と、北イタリアのフリウリ、そして広島。3箇所が舞台となる物語。朽木さんの作品ということは、必ず“原爆”のことが出てくるはず。書名からも本の表紙からも、少しも戦争の雰囲気は伝わってこない。にもかかわらずなかなか1ページ目をめくる勇気が出なかった。

ところが、読み始めてみると、作者の筆の力にひっぱられて13歳の少女になった気分でイタリアのおばあちゃんの家へと時空を超えた。

日本にいた時、この春(つまり2011年)、食べても食べてもおなかがいっぱいにならないような気がしてついダラダラ食べていた。という光。遠く離れたイタリアにきて、歓迎してくれる親戚とともに心底満たされるまでお腹いっぱい食べ、幸福感に包まれる光。東北のあの目に焼き付いた場所がはるか遠くになったから？と自問する光。

さらに光の目に焼き付いた光景も、いつかは消えてしまうのだろうか。消えて、すっかり忘れてしまっているのだろうかと問う光。

祖母との対話を通して祖母(ノンナ)の親友サラ、そしてノンナの兄パオロのことを知る光。ノンナは無二の親友サラのことも、当然ながら兄のことも、70数年思い続け、考え続けてきた。そして、正しい戦争などないと光に告げる。

アウシュビッツ、ナチス、パルチザン、ファシズム、ムッソリーニ…。

祖母が明かした“80年近く昔の数々の出来事。中学生の少女は当然だが、60余年生きてきた自分も、お粗末な認識しか持ち合わせていないことに、愕然とするしかなかった。ノンナが淡々と語ったのは、世界中の西で東で13歳、17歳いや生まれたばかりの赤ちゃんから老人までが無差別に無残に命を絶たれた凄惨な歴史。事実。「正しい戦争などあり得ない。」大切な家族を17歳で失い、兄が命と引き換えにした活動の意味、パンに残された“希望”という言葉の意味、正義とは、戦争とはと考え抜いてきたであろうノンナの言葉は心に重く響いた。

読書会に参加して、受け止めた問い。

パオロは、希望、自由を実現するために戦い、命を絶たれた。人を殺してでも実現させた希望とは何か？

ファシストを打倒するという「パルチザンが掲げた大義」が、全く関係のない、ただそこを通りかかった母子の命を奪ってしまった事実。

長い年月、パオロの死の意味を問い続けてきたノンナは、こう語っている。パオロの書き残したメモに関して。「パオロは、犠牲者の数字ではなく一人一人の名前を記したかったに違いない。それはわたしが引き継ぐと心に決めた。」と。また友人サラの残したノートに光を読んでみてと託したのは、「言葉で戦う」事への希望、ノンナの静かな決意を光に託したいという想いの表れではないかという事だ。

日本に帰国後、光は父の実家。つまり祖父母の住む広島を訪れる。何とイタリアと日本の広島が繋がる。第2次世界大戦を横糸にして。さらにフクシマへも繋がる。また方言の話になって恐縮だが、光の祖父母が語る、『やれん』これは大変深い言葉だと思う。

「わたしらにはどうにもやれんことがあってね。」よそれでも見聞きしたことがあるから広島に住んでおられる被曝者の方々共通の想いだと思うが、「原爆ドーム、公園のあたりを歩くとついに、人の頭を踏みつけてあるいような気がしてのう」と。「引き上げられなかった屍は海に流されていったんじゃが、上げ潮にのってえっと戻ってきたそうじゃ。この人たちは帰ってきたいんじゃなあ。つましうても家族が仲よう暮らしたこのまちに帰ってきたいんじゃなあ」と…。原爆被害者とか被曝者の一言でくられるはずのない14万人とも15万人とも言われるおびただしい方々の日常を、同じくそこで暮らしておられた方のまさに肉声。さらにフクシマの事故に対しても「わしはどうにもやれん気持ちになる。核がどんとに恐ろしいか。原爆をよう知るわしらがちゃんと伝えてこんかった。そのツケでああようなことが起きてしもうたんじゃないかと。」

アウシュビッツで犠牲になった子どもたちの失われた顔、失われた名前を何とかして、その子たちに返そうとしている、写真集を編纂したフランス人。それは人間の尊厳を取り戻す仕事だ。

ノンナが引き継ぐと心に決めた仕事は、ドイツでも日本でも、いや世界中の人に受け継がれている。一方で戦争という人災の被害にあう人が日々、増え続けている悲しい現実がある。一人ひとりの尊厳が保証される世界。希望が実現したら希望ではなくなるという皮肉な言葉を、『希望』という語の検索をしていて見つけた。世界が平和になるという希望が実現する日は、どこまでも遠いということか。やれん気持ちになってしまう。

◆【 MM 】

「わたし」が第二次世界大戦を身近に感じることは戦争を経験した祖母や祖父から話を聞いたからだろう。イタリア人の祖母が「わたし」と同じくらいの年頃にあった戦争。祖母の友達サラはナチスに連れていかれた。詩集を祖母に預けて。祖母の兄パオロはパルチザンとして活動して、捕まって処刑された。パオロはパンに血で描いた言葉を遺して死ん

だ。広島に住んでいる祖父からは原爆のことを聞いた。祖父は入市被爆している。祖父の妹、真美子が市内で建物疎開の作業をしていて探しに行ったのだ。原爆で死んだ真美子も「わたし」と同じくらいの年頃だった。

今年は戦後 80 年。戦争は遠い昔の出来事なのか。いや、そうではない。これから起こる可能性はあるし(現に戦争の真ただ中に置かれている国もある)、80 年前の悲劇が再度起こらないようにするのが今の私にできることではないか、と思った。でもどうやって？戦争について知ること、政治について知ること、無関心でいないようにすることだと思う。無関心でない、とはそのことについての自分の意見を持つことだとも思う。

戦争のことを知るたびにいつも思うのが、日常を送ることができるってありがたいなあと思う。そして、戦争に生きた人の中にも生活はあったのだと考える。真美子の日記の中にも13歳の女の子がいた。祖父母の話の中にもその当時「わたし」と同じくらいの少年少女がいた。彼らの生活を根こそぎ奪ったのが戦争や原爆である。本の中では東日本大震災の津波や原発事故もこれまでの生活を奪われたこととして出てくる。

物語はイタリア、広島、鎌倉で展開する。時代は2011年、1940年代、視点は「わたし」の章をはじめとし祖母の友人サラ、祖母の兄パオロ、祖母(エレナ)、真吾(祖父)が出てくる。原爆、ナチス、東日本大震災…小説だからごちゃまぜにできたと読書会で話が出たが本当にそう思う。感想文を書くときに思い知った。それぞれについて感想を書くのは難しいと。私は戦争に焦点を置いて書いてみた。